

頑張れ！女性職人

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

女性大工の話を聞いた

国土交通省住宅局が実施している事業に「大工技能者等の担い手確保・育成事業」というものがある。この事業で国は、複数の大工技能者関係機関が連携して実施する大工技能者の技能向上のための研修活動や、大工技能者が能力・経験に応じた処遇を受けられる環境整備の取り組み等に対する支援を実施している。そして、年に一度、その支援を受けた全国各地の大工技能者関係機関等が一堂に会して成果発表を行う機会がある。この事業に些か関係してきた経緯のある筆者にも

フォーム番組で見た「〇〇の達人」と呼ばれる大工、やはりテレビの特集で見た有名な社寺の宮大工、大工である親や祖父等と、憧れるきっかけになった大工の種類は様々だが、一七名中六名が幼い頃からの思いが根底にあって大工になった経緯を語ってくれた。

二つ目は、大学等で何かをやってみて、結局自分は何のづくりが好き、或いは体を動かすのが好きということを再認識し、大工の道を選んだという人たち。一七名中過半にあたる九名がこのグループだった。個別の話を紹介する紙幅がないのは残念だが、この一連のインタビューで私が強く印象付けられたのは、彼女たちのポジティブさだ。それは彼女たちが大工になった動機や経緯を聞いただけでも十分に伝わってきた。このように大工という職業を、そして建築系職人社会の仲間に加わることを、「かつこいい」という感想に代表されるように肯定的に捉える感性が豊かに存在していることには、大いに勇気付けられた。

その発表会の案内が届く。二〇二〇年度の成果発表会の時、大工技能者の技能向上のための研修活動の報告書の中に、各地での研修活動に参加した大工の人数が記載された表を見つけた。それを見ると、複数の地域の研修で女性の参加が見られた。女性大工だ。こういう研修を受ける若い女性大工が全国

各地にいるというイメージはなかっただけに、とても興味深く感じた。早速、女性が研修に参加したという報告をあげていた各地の団体に連絡を取って質問した。「この女性大工の方々のお話を伺う機会を作っては頂けませんか」と。幸い全国八団体が協力して下さり、一七名の女性大工の方々にインタビューするこ



5年目と3年目の2名の女性大工(左の2名)が刻み作業を行う加工場。北海道岩見沢の武部建設にて。(写真撮影:江口亨氏)

社会的認知に繋げたい

彼女たちと同じような動機を持ち得る若い人は少なくないと思う。しかし、その時に、特に女性の場合、大工になるという選択肢がイメージできるのか。そこが現状存在する一つの壁のように思う。今回はたまたま二〇名弱の女性大工の方々と出会ったが、全国ではもっと大勢の女性大工が活躍している筈

だ。彼女たちの存在を広く知ってもらうこと、つまり多くの人がイメージできる状態まで社会的な認知を高めること、これが先ずは重要だ。私が、ここにこうして書いているのも、小さくはあるが、そのための活動の一つである。二つ目の壁があるとすると、やはり雇用や福利厚生面の充実ということだろう。女性の働き方或いは働く環境のあり方に共通する事柄は当然検討の対象として意識され

とができた。二〇二一年のことである。

この前向きさは貴重だ

彼女たちは一体何故大工になったのか。当然、細かな事情はそれぞれで、動機や経緯に他の人との共通性をほぼ見出せない人もいるにはいる。が、敢えて共通性の高い話をグループにまとめると、一七名中一五名は次の二つのグループに入る。

一つは、幼い頃から大工或いは伝統的な木造建築の世界に憧れていたという人たち。学校の行き帰りに近所の現場で見た大工、テレビのリ

るべきだが、今回お話を伺った女性大工の殆どが工務店等の社員大工だったという事実も重視する必要がある。性別を問わず社員化という安定した雇用形態が入職者の増加に繋がることは、長らく語られてきたことだが、建設経営や建設市場のあり方、あり様との関係で、容易なことではないとも言われてきた。実際そうだと思うが、若い方々のポジティブな気持ちをもつすぐに育て、豊かな建築界を築くために必須の取組みになることは間違いない。

先日、一七名の内三名の女性大工の方々と北海道で会ってきた。現場で活躍する姿も見てきた。インタビューはオンラインでのものだったので、技能者でありながら、その動きや姿勢等を窺い知ることは一切できなかつたが、今回リアルに三名の動きを拝見して、改めて女性大工の可能性の大きさを認識できた。大工に限らない、女性を交えた職人世界の一〇年後がとても楽しみになってきた。みんな楽しんで！